

1. サンチー 大塔

從地涌出の宝塔を求めて

(その一、アフガニスタンの仏塔)

高 橋 堯 昭

仏塔にはいろいろの形がある。即ち、(一)土慢頭の形を基本としているインドの塔。例えばサンチーの仏塔の如く円形の基壇の上に半球形がつている形。然も塔自体には彫刻はなく、彫刻は門とも言うべきトラナ(第一塔第三塔)や柵とも言うべき欄楯(第二塔)にある。勿もこの塔の創建時代はBC二世紀から紀元前だから彫刻はあっても仏像は未だ出ていないが。

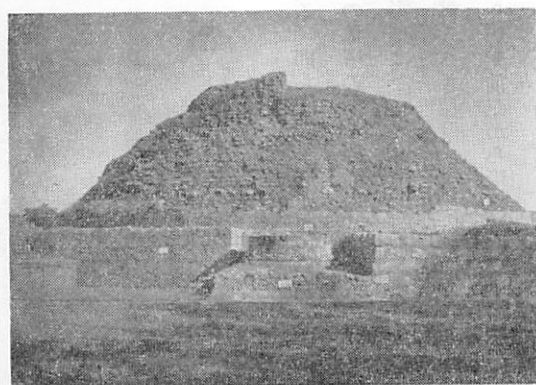
この土慢頭の形は少し時代の下るナガールジュナコンダやアマラバティでも同じである。ナガールジュナコンダやアマラバティの仏塔は現存していないが、仏塔のまわりの彫刻から推測するに、やはり彫刻は欄楯や基壇にほどこされていたと見ていい。(もともとサンチーの影響が大きいからサンチーと同型写真8参照)

仏塔自体に仏像が彫りこまれている現存の特殊な例はガヤの仏塔であるが、これはパキスタンのベジャワル郊外、カニシカ大塔で有名なシャジキデリーの塔を模したものとされている。即ちこの遺跡から粘土の板が出土しそれに塔を描いたものがあつた。これがカニシカ大塔と比定されたからである。だから、ガヤの塔はガンダーラの形式の変形と言われているし、又相当年代が下るから当面の問題にならない。

(二) パキスタンのガンダーラ地方に現存する仏塔はほとんど壊壊されているが、メインストウーバの廃址のまわりに残つた奉獻ストウーバから逆に推測するに、相当の変形が示される。

即ち土慢頭だけはインドと同じであるが、その基壇は仏像や彫刻によつて飾られていた。これを証するガンダーラ最初期のものとしてタキシラのダルマラージカ大塔が、大塔基壇に一二の仏像が残されているし、又その跡があるから、奉獻小塔と形式が同じであつたことを示している。(ダルマラージカの大塔の初期はB C二〇〇年だから、この仏像はずつと後に改修時か何かの時つけられたであろうが)

(三) ガンダーラに於てダルマラージカを古式の典型的なものとするれば、これと異なる形式の塔が紀元後から出現して来た。これはパキスタンのスワット地方やアフガニスタンのジェラバード、カブール等に残る塔の型式である。一説にはバーミヤンの石窟外に残る唯一の仏塔の残骸もこの形式ではなかつたかと言われている。



2. ダルマラージカ大塔 この反対側に二、三の仏像(パキスタン・タキシラ)



3. 奉献小塔の完成型ガンダーラ

即ちこれらの塔は方形基壇と円形基壇の組み合わせを特徴とする。サンチーのような円形基壇の下に更に方形の基壇を重ねている。然し未だ塔の土慢頭はズングリしていて、土慢頭がのびて来る新形式と区別される。この古形式から新形式への移行のプロセスとして私はカイバー峠に立つイシュボラ・トープをあげたい。やがて土慢頭の塔身が半球形からのびて大砲の弾丸のように長くなり、基壇も何重にも重なり、又仏像も基壇だけに止らず、この砲弾型の塔の横腹に祀られるようになる。即ちギリシャ風の柱頭をもつ角柱や円柱に区切られた仏龕が、恰もベルト状に塔身をとりとくのである。これはまさに仏像の発達によって極度に進んだ彫像芸術、そしてそれによって仏塔を荘厳しようとする意欲が、もともとの土慢頭型の塔身や更に基壇をも何重にも変形させて行くのであると思う。逆に言えばもともとは塔を装飾する為の仏像がやがて塔をまで変形させて行った所に興味をもつのである。否、これを変形せしめて行ったもつと深いものに。単に仏像を作るといふ芸術的な立場だけでなく、もつと深い所のものに注目したのである。

生身の舍利をまつた塔が仏像によって荘厳されて行く時、遂には塔自体が恰も曼荼羅の如くなり生身の釈尊以上のもの、しいて言えば塔自体が法身の仏を表わすような立場に自己を深化して行った。即ちそこに何か立場の相違次元の深化、自覚の徹底が行われて行ったのではなからうか。私はサンチーの仏塔

からスワットの塔形式を介して、三四世紀のグルーダラ大塔の完成された形式に移り行く所に思想の深化をよみとりたいのである。

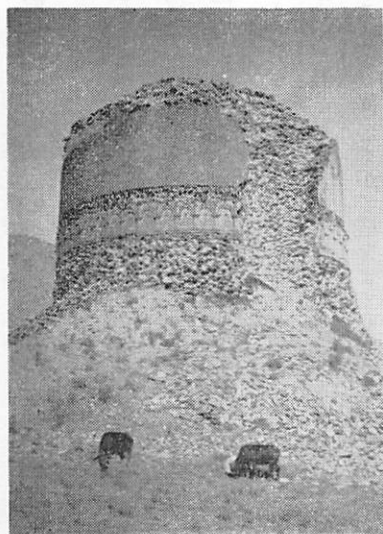
更にひるがえって我々の法華經に立ちかえてみるに、法華經はこの仏塔や仏像と密接な関係をもつといわれている。即ち法華經でも最古といわれる方便品に「乃至童子の戯れに沙を集めて仏塔をなす」「諸々の形像を建立して衆相をなせる。」「若し人塔廟宝像及画像に於て……」「若し人散乱の心に乃至一華を以て画像に供養せし……」との經文で仏塔と仏像仏画の存在が前提されていることが分る。然も宝塔涌現の説話の場面でも分るように、法華經のバックボーンとして塔と仏像がその思想表現、そしてその深化の為に説かれていることが分る。然らばこの法華經の塔とは前述の(一)、(二)、(三)の中いかなる形のものかをさすか、又この分布はどうか、この問題が逆に法華經の編纂の場所、又時代が推量されるのではなからうかと、こんな夢をいだいて、私は何度もバキスタン、アフガニスタンの仏塔を尋ねているのである。



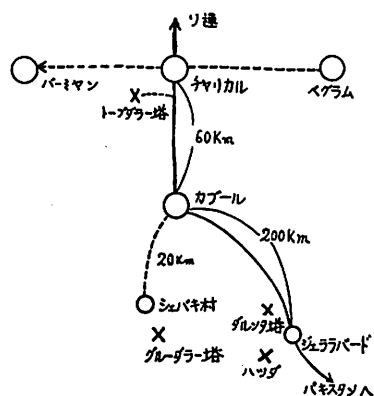
この砲弾型の塔の中、古い形式としての、トープダラー大塔とダルンタの塔址を一九六三年十月に尋ね、その完成様式としてのグルーダラーの塔をも巡礼した。

(4) トープダラー大塔

カブールから北、六十四キロの所にある玄奘の言うカニシ



4. トープダラー大塔

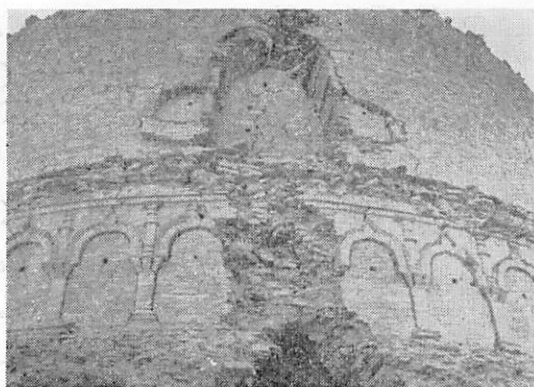


カ大塔を尋ねる。左に行けばヒンズークシュの山中五十三米の大仏のある
バーミヤン、右へ行けばかつてのカニシカ王の都ベグラムへの分岐点チャ
リカルという町。その少し手前から西へバグマン山脈の麓にわけ入り、石
ころだらけの道进行。国道からはるかに山の麓に見える塔に向う。塔は
村落の一番奥深い所にある。塔のすぐ下、ハゲ山とハゲ山との谷、山の壁
といった所だけ水がしぼれて谷川となり、木のみどりが目にしみる。ト
ブダラーとは塔の谷の意味とか、まさにその名の如き風景である。

部落の一番奥、大分高い所だ。近ずいて見ると相当大きい。直径二十
—二十五米。高さ二十米もある。基壇がこわれて石屑が山のようになり、
この上に塔が立っている。然も塔の一部や基壇に近い塔身の表面がくずれ
ているが、幸いなことにベルト状に花頭窓状の仏龕がぐるりと塔をとりまいてるのがよく残っている。この仏龕を
区切る柱の柱頭は鐘形で柱基に壺形をともなうインド式柱形でジュラバードより形式が後期といえよう。

特に注意すべきは正面に中心龕が作られていることである。即ち連続した仏龕の上に、普通龕の倍以上の大きな三
葉龕が作られている。この龕の中の奥上には円形の光背が残っている。この三葉仏龕は主仏龕の両側に協待の仏か、
将た又礼拝者かが安置された小さな龕が作られているものである。これはガンダーラの博物館などの小さな彫刻に、
「中尊と協待」「中尊と礼拝像」というのがあるから、ここの塔の主龕も明らかに類似のものに違いない。

マツソンがあけた穴が塔にあいている。これから見ると塔の中心は石塊と泥をつめたもので表面だけ割石で化粧し



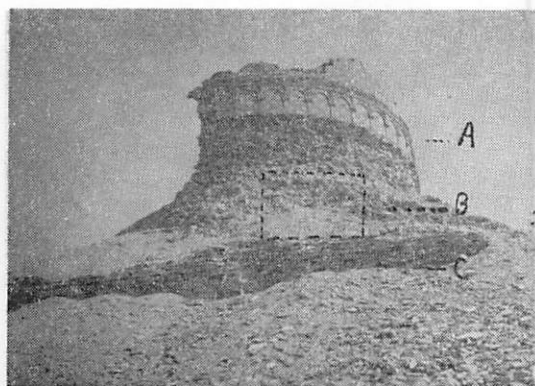
5. トーブダラー塔の中心龕

ている。積み方は「地文様」であるが、いたって不整形で不規則な割り石を積んだ所が多い。だからけっして初期のものでない。(初期のもの程規則的) 又ジェラバードの仏塔との類比から一乃至三世期の塔と推定される(京大報告書)、これはシェバキの諸塔は地文様積みの伝統をがっちりふまえているが、このトーブダラー塔はこの積み方がくずれているから前述の年代が読みとれるのである。

基壇にはきつと仏龕が作られていたであろうが今はないが他塔例えばダルンタの塔との類推から仏像も……はめこまれていたであろうことが推測される。

(ロ) カブールから百五十キロのジェラバードの入口、現在のダルンタの人工ダムの堰堤の所からシアコーの山脈に沿ってかつて多くのストウーパが立ち並び、山の裾には石窟が並んでいた。このダルンタには現に残っていないから、あとの塔の状況が推量されようというもの。

塔は基壇は崩壊し、大きな山のように。基壇の一部は土塊の中にかろうじて散見出来る(写真6のCの部分)。然しこの基壇はよく注意して見ると柱の頭部が見え、又仏像をはめこんで止めたであろう穴がかすかに見える。更に二重



6. ダルンタ第一塔

の基壇の一部ではなかるうかと思うが、Bの点線内に一九六五年京大隊の調査の時の写真に柱と柱の間に仏龕があるが今はくずれて了ってない。私の撮った写真の同じ場所には全く何も残っていない。諸行無常とはいえ、余りにも早い遺跡の崩壊に心をいためる。

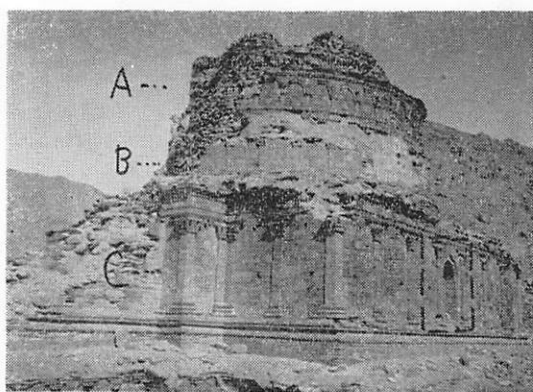
マウソンによれば周囲四十三米、もとは基壇の東側に階段がついていたらしい。

又Aの龜形の柱形はインド・コリント式と呼ばれるアカントウスの柱頭の角柱である。この龜のあいだにはインド式の鐘形柱頭飾のまるい柱形がある。この柱頭飾はトープダラー塔と全く同じ様式であることは前に述べた。又柱に区切られた列龕は比較的によくこの部分だけが残っている。この列龕の上の伏鉢体は大石とその間につめられた石板との模様が市松模様のように印象的であった。

この塔は前述の如く半分しか現存しないから、そのグルーダラーのように奥深く彫りこまれた仏龕、大きな三葉仏龕即ち三尊形式と思はれたものがあつたかどうか分らないが、トープダラーの列龕と全く同じ作りだから、これがなかったとはいひ切れない。とにかくダルンタの塔は塔に写真の如くA・B・Cの三重の仏龕があつたことは証明されている。

否それ以上あつたかも知れない。なぜなら写真3のガンダラーの奉献ストウーバが四層以上の仏龕帯があるからである。

(イ) グルーダラー塔



7. グルーダラー塔

塔の一番完成された形としてはグルーダラーの塔である。

カブールから二十四・五キロ位はなれたこの塔を尋ねる。このグルーダラー塔より時代的に早いシエバキの塔群についても観察して見たかったが、今年は何年ぶり、否何十年ぶりの洪水で道が荒れたというので来年にまわして「塔の完成」に近いこの塔を尋ねる。結局はこの塔への道も同じく荒れていて苦勞するのだが。シエバキ村を左に見てカブールからまっすぐ南へ走る。シエバキの尖塔、現地人はミナレットと呼んでいる石幢を山の頂に見て進む。このような遠方から見て、かくも大きく山の綾線に見えるには三十米の高さはあるであろう。然もあの高い山の上に、あれ程の塔を建てた当時の仏教の隆盛と熱烈な信仰が推し計かられるようだ。

道はロガール川を渡って細い間道に進む、(地図参照)道とは名ばかりの道。特に部落を過ぎて山の麓を東へ進むに至っては猶更である。この山の北側がシエバキ村に当る。車を捨てて川原のような道を進むこと五・六料程。ようやく小山の上にグルーダラー塔を望む。河原から塔へ登る道は今はない。唯羊飼いのふみしめた獣道をさがしてのぼる。のぼりついた所に写真7のような塔が立っている。

その構造は、一番下に一米位の低い方形基壇。その上にギリシャ風の柱頭をつけたであろう角柱に区割された仏龕C。これは東西南北に各面夫々左右に三つずつの仏龕をもつ方形基壇がついている。特に各面中央には深く彫り込ま

れて恰も塔への入口のように思われる中央龕がある。又四面全体に作られた壁面には仏像をとめたであろう穴が残っている。

この上には更に高さ五十センチ位の低い円形の基壇がまわっている。更にこの上にBの円形塔身があり、部分的な破損はいちじるしいが、わずかに残った角柱に区切られて、当時仏が祀られたであろう壁面が見える。

この上に更にユニークな帯状に仏龕帯Aがのっている。然も花頭窓状への仏龕と「状の仏龕が交互に作られている（これと同じ様式がガンダーラの奉献小塔に見られ、又タキシラルマの供養塔にもあるが、それらは大体三世紀終りから四、五世紀だからこの塔の建立年代が推定される。大体三・四世紀という所だろう）

又各仏龕をしきる角柱の上には細長い蓮華のつぼみ状のものが土で作られている。これはアーカンサスの基部でガンダーラやこの地方独自のものでこの上にシツクイでアーカンサスを作った土台である。

特に興味をもつのは「と」の仏龕が一つおきに作られているが、これらの仏龕は又一つおきに仏像をとめた穴があるから、一見すると一つおきに安置したとも考える人もあるらしいが、Bの中の列柱帯は全然仏像をとめた穴はない点から考えて、穴のあるなしに拘らず、すべてに仏像がはめこまれていたと考えるのが自然であろうが、今は崩壊して了っているから當時を推量するにすぎない。推量するといえどAの列柱帯の上の伏鉢部はこわれて了ってこれ以上列柱帯があったか、又トープダラー塔の如く三葉の中心龕があったかどうかとも分らない。もしなかったとすれば基壇の中心の深く彫られた龕が中尊を祀った所かも知れない。いずれにしても、もう少し残っていてくれたらもっともっと大きな意義を我々にさし示すに違いない。

更に正面のくずれた階段からほぼその原形がうかがわれるし、全体としてすべての上ぬりやシツクイがなくなつて

いて石積みが直接露出しているから造塔の年代の資料となる（マーシャルのタキシラ参照）

この塔の裏手に僧院があつて当時の僧の生活がしのばれる。又第二塔が崖の中途に残っているが、現在はほとんどくずれている。

この塔の見学をおえて塔の横からの眺望をたのしむ。あたりは死の山、みどり一つない山や河原のような道。然し遠く白く光る死の山の麓にみどりの原野が続いている。ここがこの山寺のスポンサーとなった村落であらう。当時の僧は貯えは禁ぜられたから毎日托鉢する為に部落は近くなければならぬ。又この河原のような道はジェラバードに通ずる古い道。東へ行つて峠をこせばシエバキ村からジェラバードへの道に合流する。シエバキ村共々、通商路沿いであつて、仏教が通商路沿いに発展して行つたことがしのばれる。

かくてトープダラー、ダルンタ、そしてグルーダラーと仏塔の発達跡をみて歩いたが、その石積み様式から推量するにダルンタが一番古くガンダーラの仏塔をうけて作られている（クシャン初期AD五十一—一五〇）次がトープダラー（一乃至三世紀の塔）そしてシエバキの塔がクシャン盛期の一五〇年から二五〇年だからグルーダラーの塔はその終末期の三乃至四世紀であらう。

時恰も大乘仏教の隆盛期だから、これらと何らかの關係はないとは言えない。特に仏塔教団として形成された法華教団とは猶更である。



では経文にたち帰つてこの仏塔との關係を法華經の宝塔品について考えて見たい。

(1) 漢訳では「爾時仏前、有七宝塔。高五百由旬。縱高二百五十由旬。從地涌出。住在空中。種々宝物。而莊校之。



8. アマラパティの彫刻
かつての塔がしのばれる

五千欄楯。龜室千万。無數幢幡。以為嚴飾。垂宝瓔珞。宝鈴万億。而懸其上。四面皆出。(羅什本)」又サンスクリット本では「七宝づくりの塔が地中から出現した。華麗で美しい塔は地上に現れると空中に聳え立ったが、塔は、花の、充ちあふれた、五千の、欄楯で飾られ、幾千という多くの、弓形の門が設けられ、幢幡や長い旗が幾千本も垂らされ、宝石の環が幾千となく吊され、紐で連らねられた鈴が幾千も吊され……(岩波文庫法華経岩本氏)」とある。この経文中に現実的に真理性をもつと思われるのは現在ネパールの目玉寺やチオルテン、又はセイロンの塔では塔の尖端、日本流の所謂九輪の先端より無數の旗が恰も小学校の運動会の万国旗よろしく何本も飾ざられているのを見る。これは古くはナガールジュナコンダやアマラパティの出土品中、仏塔前に何本もある柱はこの幢幡嚴飾のためであったことから経文はけっして荒唐無稽の非現実的な空想の産物でない。

(2)「塔には花の充ちあふれた五千の欄楯がかざられ幾千という多くの弓形の門がこの宝塔の中にあると見える」という表現の「弓形の門」とはけっして仮空のものではなく、まさに今まで見て来たトープダラー、ダルンタ、グルーダラーの塔に見られる仏塔のまわりの無數の仏龜を示すのではなからうか。そしてこの文章の前の「五千の欄楯ありて」というのはギリシャ風アーカンサスの柱頭をもつ柱が無數に並ぶさまが恰も欄楯の如く見えたのではなからうか。大体インドでは塔のまわりに柵とも言

うべき欄楯があるがガンダーラではこれがまわりにある遺跡はほとんどないと言つてもよい。然し大きい塔はサンチーの塔の如く塔の途中に塔をめぐる繞道をもつものはあつたから、この繞道のまわりの欄楯かさもなくてギリシヤ風の柱が無数に並ぶさまを「塔には花の充ちあふれた五千の欄楯」と言っているのかも知れない。かく法華經の經文はこのような現実を反映していると考えられるから次のことが類推される。

(3) 即ち「時娑婆世界即變清淨。瑠璃為地宝樹莊嚴。黄金為繩以界八道」「マンダーラヴァ花やマハマンダーラヴァ花落市街地、王国首都なく、カラ山もなくムチリンダ山……その他の大山もなく……配置せられた。」又一變無大海江河及目真鄰陀山、……須弥山等諸山王。通為仏国土。宝地平正」従つて「これらのブツダの國々は一つのブツダの国土となり平坦で美しく七宝作りの樹木で飾られた」とある。この理想の世界が「宝地平正で山も谷もない」ことを強調し平正を理想とすることは逆に「平正でない所」「山あり谷あり」の現在の沙漠まがいのこのガンダーラ、アフガニスタンのような所を前提としているのではなからうか。宝塔の涌現する所即ち仏国土なるが故にこの山だらけの沙漠がこの場所舞台となると考えるのは考えすぎなのだろうか。

(4) 更に教典に「於是釈迦牟尼仏、七宝塔戸。出大音声。如却闔鑰。開大城門。即時一切衆會。皆見多宝如来。於宝塔中。坐師子座。全身不散。如入禪定……。」「世尊は空中に聳え立つ大きな宝塔の中央を右手の指で開いた。開くと二つの扉に分かれた。すなわち例えば大きな城門の大きな掛金を取り去つて開くように、世尊は空中に聳え立つ大宝塔の中央を右手の指で開いたのである。かの大宝塔を開くや否や、完全にさとりをひらいて世の尊敬をうけるに値いする尊きブラブータ・ラトナ如来が恰も瞑想を完成したかのように、四肢が痩せ身体は衰えて玉座に坐り、足を組

んで安坐しているのが見えた」更に「爾時多宝仏於宝塔中、分半座。与釈迦牟尼仏。而作是言。釈迦牟尼仏。可就此座。即時釈迦牟尼仏。入其塔中。坐其半座。結跏趺座。」このサンスクリット文「……かの大宝塔の真中にある王座に坐つて空中にいるのが見られた」とある如く、多宝如来と釈迦牟尼仏が並坐された仏龕は塔中の真中にある王座であつて、並通りより大きいものでなければならぬ。これは恰もトープダラー塔の大仏龕やグルダラー塔にほりこまれた中心龕の如きものではなかつたらうかと考える。

然し法華經の記述によると塔は戸がついていたことになる。然し戸のついた龕はインドにはない。日本の五重の塔の如くの中に入ることの出来るような塔はインドは勿論バキスタン、アフガニスタン……にはない。このようなのはシナや西域へ入つて木造の塔になつてからである。勿もシナへ入つても大部分は土をレンガでまき然も仏像をまわりの龕に安置したものであるからである。故にこのような法華經の表現は現実のこれらの塔のようなものを土台として想像力を加えて出来たものではないかと思う。然してこれらの塔即ちトープダラーや、ダルンタの塔はいずれも一五〇年から三四世紀のものと比定されている。又法華經の原初の部分たる方便品は前に引用した如く仏像の成立を前提しているから仏像の成立後、(高田博士によるとクシヤン盛期一五〇年頃仏像は成立。これら塔と經典の両者が何らかの關係がありはしないかと見るのが自然である。従つてこれらの塔のように完成した塔を前提として法華經が生れたとは言えないにしても、ガンダラーの古式のものが増すあつて、これをサンプルとして想像をたくましくして思想を深化する。これに対応するかの如く、塔の方もダルンタトープダラーと塔身や基壇が発達……し遂にグルーダラーの如く完成する。その時には最早思想は一層進展して生身の舍利信仰からむしろ法身という自覚は未だないにしてもそれに近いものへと進展して行くのである。その時代の自覚の双生児として生れ出でた經典と塔は又その後交

互影響作用によって更に更に思想を進化して行くのである。

然してこの塔が大乗か小乗かははっきりしない。大乗になって仏像が出たのではなく、ほとんどが小乗の寺に仏像が祀られていたからである。これはガンダーラのタクティバーの如く、仏像の成立時代はほとんどの寺は小乗で大乘はこの寺にある仏塔を信仰する在家のあつまり、非オースドックスのものであったと考えられるからである。（樓神四十五号）然し、私は塔が改修されて仏像でおおわれる頃は最早、小乗とは別の立場のものに移り行ったであろうことは容易に推測されると思う。



即ち仏像の出現を契機に一躍、仏塔の姿が変わって行った。すると前述の如く生身の舍利を祀る立場からもっと広く深い立場に変わって行く。塔自体がむしろ法身として把握されるような思想が出て来る。思想が出来ると逆に塔を規定してもっと複雑な塔になる。これは前述の如くどちらかが先というのではなく、この時代の自覚が一方では思想に一方では塔に複雑化を促進して行き、出来上った時点でお互を刺戟し合って行くのである。

然してトープダラーの如き大仏爺は三尊仏と考えられる。三尊仏はカニシカ王奉獻のカニシカ舍利器に梵天帝釈をもなった釈迦像が現存するから、これと同じ時代のトープダラーにないとは言えない。然し法華経のような二仏並坐像は今般ガンダーラの博物館を丹念にしらべたが得られなかった。それ故これは法華経の独自の思想表現の手段であると思う。勿も二仏並坐像によく似たのに二仏ではないが、パンティカとハリティの並坐像がガンダーラに非常に多く見出されるから、或はこんなものが刺戟になって思想の表現の為に使われたのかも知れない。そして出来たこの像と塔が又思想の深化にも大きな力を与えていると言えよう。この問題は次に詳説しよう。

かくて今回巡礼したトーブダラ、ダルンタ、グルーダラーの塔の複雑化とその建造年月の違いから私の興味ある問題を考えて見た。私は次にこのガンダーラの初期のものから今問題にした三つの塔へのプロセスとして次にはスワットやタキシラの最北部の塔を考えて、今問題とした問題を考へ更に更に進めてみたい。

参考文献

- 1、京大報告書 バサーワル・ジェララバード・カプール
- 2、marshall, Taxila 3 vols.
- 3、藤田国雄氏（国立博物館）アフガニスタンに於けるクシヤン朝の美術に関する二、三の問題
- 4、高田修氏、仏像の起源
- 5、全 仏教美術史論考
- 6、水野氏、文明の十字路
- 7、岩波文庫 法華経
- 8、Ingbold, Gandhāran Art in Pakistan
- 9、Dynastic Art of Kushan その他、カプール博物館指導